

奇才と表現できるような能力のあるアメリカの学者レイ・カーツワイルが二〇〇五年に出版した大部の著書『シンギュラリティーは間近』（邦訳『ポスト・ヒューマン誕生』）は急速に能力を向上させている人工知能が二〇四五年になると人類全体の脳力の合計を上回ると予測し、その時点シンギュラリティー（技術的特異点）と名付けて話題になった。

それとは視点が相違するが、二〇一三年にイギリスの二人の学者が共同で「情報技術が消滅させる職業」という論文を発表し、現在の社会に存在する約九〇〇の仕事が二〇三〇年にも存続している確率を計算した。反対の視点から表現すれば人工知能などの情報技術によって人間の仕事が駆逐される確率である。

数例を紹介すると、消滅する仕事は通信販売、情報調査、時計修理、税務処理、保険引受などであり、存続する仕事は危機管理、精神治療、余暇療法、職業相談、口腔外科などである。この一〇年間で技術は急速に進歩しているので変化はあるにしても、人間と人間の関係で成立する仕事は存続できるという傾向にある。

二〇一七年にはアメリカとイギリスの学者が「人工知能が人間の能力を代替する時期」という論文を発表した。原稿朗読、演説原稿代筆、自動翻訳は二〇二四年に代替、自動運転、流行音楽作曲は二〇二七年、流行小説執筆は二〇四九年、外科手術が二〇五三年であるが、すべての仕事を代替する時点は二〇六一年になっている。

ここまで紹介した予測に共通する特徴は現実が予測より先行していることである。NHKのニュース番組では一部を人工知能による合成音声で放送している。二〇二〇年には英語の能力検定のTOEICで人工知能が九〇〇点を突破している。これは正解の比率が九〇%以上で、受験者数の四%程度しか達成できない能力である。

自動運転で先行しているアメリカでは一部の地域で「レベル4」（特定の条件の環境で人間が関与しない自動運転）の技術を使用した自動運転タクシーが運行されているし、日本でも過疎地域や高速道路など限定された場所での「レベル4」が認可され、一部の地域では昨年から自動運転バスの実証実験が実施されている。

そして最初に紹介したシンギュラリティーに接近してきたのが二〇二二年から登場した「チャットGPT」に代表される生成人工知能である。現状では完全ではないにしろ、どのような質問にも返答する技術はカーツワイルが予言した二〇四五年の状況を二〇年近く前倒しで実現しており、人間の役割の再考が要求される状況である。

これに対処する方法の検討が必要である。その発想の根底は情報から情緒への移行である。情報理論が処理する情報は所有する人間が少数であるほど価値があると定義されるが、人気小説や人気音楽のように共感する人数が多数になるほど価値が増大する性質のある情報がある。これを情緒と名付けて検討してみよう。

これまで存在しなかった新規の音楽や小説は情報として測定すれば価値があるが、多数の人々が共感しなければ情緒としての価値は低位である。そのように整理してみると、今後、技術が進歩しても人間が分担する役割の比重は情緒に移行する。教育の基礎としては情報理論が重要であるが、情報と人間との関係を理解する情緒理論がより重要になる。